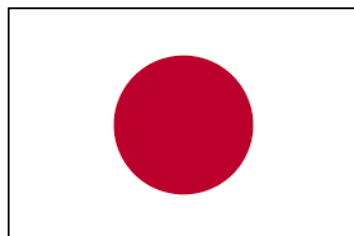


ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO



ヴァルチツェ城

国立文化遺産、ユネスコ世界遺産

ガイド付き城内見学ツアー
(基本コース)



NÁRODNÍ
PAMÁTKOVÝ
ÚSTAV



facebook.com/zamekvaltice
www.zamek-valtice.cz

ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

ヴァルチツェ城は、オーストリアとモラヴィア地方の国境に位置しており、11世紀後半のパッサウ司教による植民地化活動に関連して建立されたとされています。この中世の城は、中世の有力なオーストリア貴族（ゼーフェルト家やケーリング家など）によって所有され、何度か所有者が変わりましたが、最終的にヴァルチツェは1395年リヒテンシュタイン家の所有物となり、1945年、大戦後に没収されるまでリヒテンシュタイン家が主要な邸宅として所有していました。近隣のミクロフを売却しなければならなくなった後、16世紀後半にヴァルチツェがリヒテンシュタイン家の主要な邸宅地となりました。その時期から、この地で改築が始まりました。それぞれの侯爵が、自分の好みや、ウィーンの宮廷での立場に応じて、邸宅を改造していきました。チェコの総督であり、また一家の権力を打ち立てたりヒテンシュタイン侯のカール1世の統治時代に、初期のバロック様式で城が改築されました。その後、カール1世の息子で、芸術を愛したりヒテンシュタイン侯のカール・オイゼビウスが城を居住地にすると、17世紀の間長きにわたって城を改築しました。しかし、最も大きな改築は、18世紀初頭、アントン・フローリアン侯の政権下、建築家アントン・オスペルの設計によるものでした。この盛期バロック様式の改築によって、城は現在の姿になりました。次のヨーゼフ・ヨーハン・アダム侯の統治時代、宮廷の劇場建築家であり室内装飾家のアントニオ・ベドゥッツィが活躍し、城のファサードを改修し、飾り縁や正門、石像があしらわれた切り妻屋根をさらに建設しました。これから見学していただく内装は、ロココ・リバイバルと呼ばれる様式で1940年代に改装されたものです。元はオーストリアの町であったヴァルチツェは、1920年サン＝ジェルマン条約に基づきチェコスロバキアに統合されました。第2次世界大戦後は、城内はホップ倉庫や女子刑務所など、さまざまな施設として利用されました。内装は、1960年代に改装され、見学者に公開されるようになりました。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

謁見室 (Audience chambre)

謁見室は、ピアノ・ノビーレ、すなわち邸宅の主要な階（ここでは1階、日本式2階）の最初の部屋です。侯爵たちが普段滞在している時は、リビングルームとして機能していました。また、様々な磁器のコレクションが展示棚に収められて保管されています。隣のダイニングホールで夕食会や歓迎の宴が行われた時は、謁見室は臨時の準備部屋に変わり、使用人たちの控室として利用されていました。隣接する客室に大切な賓客が滞在している時は謁見の間となり、ここで来客を迎えました。

壁には、日本の伊万里焼の皿や鉢が飾られています。伊万里焼の名称は、伊万里港にちなんでつけられたもので、この伊万里港から磁器がヨーロッパに輸送されていました。城は、主にタイル製の暖炉が使用されていました。この部屋の暖炉は、19世紀初頭のもので、宮廷のリーフ・モチーフの装飾が施されています。暖炉の薪は、廊下側からくべられます。このような暖房様式は、他の部屋にも共通でした。

皇帝の居室につづく控えの間 (Anteroom of emperor's apartment)

この部屋で見たいのは、東洋の花のモチーフを用いた、18世紀終盤からそのまま保存されている壁紙で、これはロココ調の内装のために東洋から輸入された貴重な壁紙を模倣しようとしたものです。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

小さなチェストの上には銅像が立っており、これはリヒテンシュタイン侯のアロイス2世の像です。レドニツェ城を訪れた人なら誰でも彼の名前を目にしたことでしょう。というのも彼はあの荘厳な城のネオゴシック様式の改築の発起人であるからです。この侯爵は、その頃のオーストリア帝国の中で最も裕福であった侯爵の一人であり、彼はまたロココ・リバイバル様式でヴァルチツェ城の内装を一新しました。装飾は、あまりにも完璧にバロック調とロココ調の芸術を表現しており、多くの専門家も建築様式の判別に困惑しました。

壁には、デュ・ヴィヴュによって描かれたナポレオンの肖像や、古代のローマ神話のロームルスとレムスの絵画が掛かっています。19世紀の終わりに、この部屋に2つの木製の小部屋が取り付けられました。一つには現代的なバスルームが設置され、二つ目の小部屋には、作業部屋のある地階へと続く、業務用の隠し階段が取り付けられました。

キャンバスに描かれた天井画は、ギリシャの時間の神クロノスが栄光の女神を黄泉の国へ連れていく様が描かれており、人の世の栄華のはかなさを表しています。

皇帝の広間 (Emperor's salon)

この公式の広間は皇帝の居室の中で最も重要な部屋で、城の主がここで客人を迎え、会合が行われました。この部屋は、赤いブロード生地の上の壁紙が張られており、1840年代のバロック・リバイバルと呼ばれる時代の調度品が設えられています。調度品の



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

中で最も素晴らしいものはテーブルで、その天板はピエトラ・ドゥーラという技術を用いて切り取られた、様々な種類の石材を嵌め込んで作られたものです。

壁には統治者の肖像画が掛けられています。マリア・テレジアと夫であるロートリンゲン朝のフランツ・シュテファンの肖像画があります。反対側の壁には、彼らの息子である皇帝ヨーゼフ2世と孫である皇帝フランツ2世の肖像画が掛けられています。最後の2つの肖像画は、若い夫婦のもので、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世と彼の美しい妻、シシィの愛称で知られるバイエルン出身のエリーザベト皇后が描かれています。

この居住スペースが皇帝用の居室と呼ばれているのは、皇帝フランツ・ヨーゼフに敬意を払ってのことです。1876年に皇帝は、近隣のミクロフで行われた軍事演習を視察するためヴァルチツェを訪れました。当時の新聞には、この訪問について詳しい記事が掲載されました。

皇帝は側近とともに9月2日の午後1時頃ヴァルチツェにご到着された。町の広場は国旗で飾られ、ヴァルチツェや近隣の人々で溢れかえった。皇帝は正門の前で馬をお降りになり、城の敷地に向かい、そこで正式に市長と児童から歓迎をお受けになった。その後フランツ・ヨーゼフ1世は徒歩で城にお向かいになり、そこでリヒテンシュタイン侯ヨーハン2世からの心からの歓迎をお受けになった。

その晩、城の劇場では皇帝のご訪問を祝して特別な演目が上演され、皇帝や側近、また軍の上級幹部が出席した。

9月4日の午後4時半ごろ、ルドルフ皇太子とイギリスのアーサー王子が国の側近と外務職員とともに宮廷の特別列車でご到着された。皇帝は、イギリスの王子をお出迎



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

えになるために前もってその地の駅を訪れ、列車が到着するまでのかなり長い時間、駅長のレッシュ氏と和やかにご歓談された。

ご挨拶がお済みになると、皇帝とアーサー王子、皇太子は家庭教師と共に宮廷の馬車に乗って、城へと向かわれた。城の庭園では、イギリスのアーサー王子とルドルフ皇太子の歓迎式典が執り行われた。彼らが到着すると「万歳！」と歓声が上がり、楽団がイギリス国歌の「神よ女王を護り賜え」を演奏した。歓迎をお受けになった後、ゲストたちはそれぞれ城へ戻っていった。1階にあるその他の3つの居室はそれぞれ、アーサー王子、バイエルンのレオポルド王子、ルドルフ皇太子に割り当てられた。その後、お祝いの晩餐会が開かれた。

9月5日、貴族のゲストたちはレドニツェのリヒテンシュタイン侯のもとを訪れた。軍事演習が終了すると、皇帝はすぐご出立された。

アンフィラード (Enfilade)

東棟のそれぞれの部屋の扉は、一直線上に等間隔で並べられており、端から見ると印象的な眺めとなっております。この建築技巧はアンフィラードと呼ばれ、特にバロック時代によく使われたものです。ヴァルチツェ城のアンフィラードは、9つの部屋から構成され、80メートルの長さがあります。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

皇帝の寝室 (Emperor's bedroom)

皇帝の寝室は、部屋の奥まったところにベッドが置かれており、隣接する広間とは異なりかなりプライベートなゲストルームです。フランツ・ヨーゼフ 1 世は、軍事演習中もウィーンでの生活リズムを保持していました。朝 5 時に起床し、演習プログラムが始まる前に、前日に首都から電車で届いた通常の公務をこなしました。そのために、寝室には簡素な机と椅子を用意させました。寝室で皇帝は着替え、朝食をとり、従者が付き添って体を清めたりもしました。

簡素な家具で設えられた部屋ですが、一点だけ心地良い調度品が付け加えられています。シェーズロングと呼ばれる長椅子はロココ時代のもので、短時間の午睡用に作られたものです。

ベッドの上には、リヒテンシュタイン侯の宮廷画家、ピーター・ヴァン・ロイによる聖母マリア（悲しみの聖母）の絵が掛かっています。机の上にはリヒテンシュタイン侯のヨーゼフ・ヴェンツェルの肖像画があります。外交官で、また素晴らしい軍指揮官でもあったヨーゼフ・ヴェンツェルは、ヨーゼフ 2 世の言葉によると「帝国の繁栄に欠かせない人物」であり、女帝マリア・テレジアと親交の深かった人物の 1 人でした。

窓のそばにある大きな絵画のスケッチは、そのオリジナルの絵画はウィーン軍事史博物館に保管されています。1815 年 6 月、皇帝フランツ 1 世とリヒテンシュタイン侯のヨーハン 1 世が参加する中、オーストリア軍がヴォージュ山脈を越える様を描いたものです。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

リヒテンシュタイン侯のヨーハン 1 世はナポレオン戦争でフランスと戦いました。オーストリアの騎兵隊を率いたアウステルリッツの戦い後の 1805 年、オーストラリア側を代表し、休戦協定に署名しました。1809 年から、オーストリア軍最高指揮官、陸軍元帥となりました。

ヨーハン 1 世は狩猟用の邸宅をロマン主義形式で建設させました。またこの様式でレドニツェ・ヴァルチツェの敷地は装飾されています。

左側には、バイエルンのレーゲンスブルクの戦いの絵があります。1809 年 4 月 23 日に勃発し、オーストリア軍がナポレオン率いる軍に大敗北を喫しました。

書き物机の上にあるスケッチは、ヨーハン 1 世の弟であるアロイス 1 世の妻、カロリーネ（マンダーシャイト＝ブランケンハイム）の肖像画です。

天井画は、オリンポスの神々がタイタンを討伐する様子が描かれています。

喫煙の間 (Smoking lounge)

暖炉のあるあまり大きくはないこの部屋は、客室にある非公式の社交場です。19 世紀の目録には、この部屋のことを喫煙の間と記されていました。フランツ・ヨーゼフ 1 世の滞在中、この部屋は夜間、使用人がいつでも対応できるように臨時の寝室として使われました。部屋は簡素な古典主義様式の家具で設えられています。2 つの静物画は両方ともドイツ人画家のフランツ・ワーナー・タムによる 1709 年の作品で、扉上部のローマ皇帝たちの胸像が施された装飾も同様です。タムはこの分野においては、中欧



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

の盛期バロック時代の第一人者であり、リヒテンシュタイン侯の画家としては 1706 年から活動しました。

天井画には、火の神であるヘーパイストスが戦争と知恵の女神であるパラス・アテネに武器を渡す様が描かれています。

100 年以上も前の東洋の絨毯の柄は、生命の樹を表現しています。

書き物机の上に掛かっているスケッチは、オパヴァの町の都市景観画で、この地の総督で、リヒテンシュタインの侯カール・オイゼビウスが、父カールの後を継いで政権を執ることになったことを祝して 1632 年に街でパレードをした時の様子が描かれています。

反対側の壁には、皇帝カール 4 世の家庭教師で最高監督者であったアントン・フローリアン侯の大学の卒業論文を見ることができます。

ダイニングルーム (Dining room)

ダイニングルームは、城の中で最大で最も格式高い部屋です。18 世紀の終わりから城に大広間がなくなったので、ここは主要な公務の場でもありました。ロココ・リバイバル様式の贅沢な建築デザインが、この部屋の重要性を物語っています。壁は、ストゥッコ・ルストロという技術を用いて塗られました。これは、石灰、砂、または磨かれた大理石の粉末から作られたしっくいを湿った状態で塗り、乳化した蠟でコーティングし、また熱い状態で磨くといったものです。部屋の装飾は他にもドア上部にあ



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

る楽器をモチーフにした金色のレリーフや、窓の上には金箔でコーティングされた化粧しっくいがあります。最も注目すべき調度品は、宮廷装飾が描かれた2つの金色のコンソールテーブルです。

庭園 (Garden)

窓の外をのぞくと、ヴァルチツェ城庭園の最も印象的な、アンフィテアトルム（円形劇場）と呼ばれる部分が見えます。土地を購入して家々を取り壊した後、リヒテンシュタイン侯ヨーハン2世の命で1900年になってすぐ建設されました。元々は傾斜地にブドウ畑があったのですが、20世紀の最初の10年間にフィレンツェの造園家、ヴィンセント・ミケーリの計画に基づき更地になり、それからモラヴィア北部の領地からヴァルチツェに持ち込まれたバロック様式の像で装飾されました。新しく作られた庭園は、18世紀半ば以降ヴェルサイユ出身の造園家、ドミニク・ジラルルによって設計された古いバロック様式の配置図を受け継いでおり、また、城の東棟の地階にある「サラ・テレナ」と呼ばれる建物にもつながっています。ファサードは、レドニツェの厩舎を思い起こさせるもので、長い間オーストリアのバロック建築家、ヨーハン・バーナード・フィッシャー・エルラッハによる作品だと思われていましたが、その姿から20世紀初頭のもので、王子に仕える建築家、カール・ヴァインブレーナーの設計によるものだと判明しました。



NÁRODNÍ
PAMÁTKOVÝ
ÚSTAV



facebook.com/zamekvaltice
www.zamek-valtice.cz

ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

娯楽室 (Games room)

最初にご紹介する社交用の部屋は、娯楽室として利用されていました。1945 年まで部屋の大部分を占めていたのはロシア製の巨大なビリヤード台でしたが、おそらく赤軍による占領時に破壊されてしまったようです。ビリヤード台の他に、カードゲームやチェス用のテーブルも数台設置されており、リヒテンシュタイン家の人々と訪れた来客者がそこで余暇を過ごしました。

華やかな青いソファや椅子のセットは、ロココ・リバイバル時代のもので、ヴァルチツェ城のものでしたが、第二次世界大戦の終わりに、王子フランツ・ヨーゼフ 2 世の命でヴァルチツェ城とレドニツェ城の設備や絵画の一部を戦線が近づいているという理由でファドゥーツへ輸送しました。

2008 年現在の侯爵であるハンス・アダム 2 世は、アムステルダムで行われたオークションで自身のコレクションを売りに出しましたが、その中にはヴァルチツェ城にあった物品も含まれていました。当時のチェコ政府はおよそ 1000 万チェココルナを捻出し、元々城に設置されていた 10 点の絵画や 80 数点もの椅子や肘掛け椅子を買い戻しました。

大きな食器戸棚や、象嵌細工が施された書き物机は、後期バロック様式で 18 世紀中ごろに作られました。食器戸棚のお皿は、英国の陶磁器メーカーであるウェッジウッド製の 19 世紀のもので、元々ダイニングセットとして使われていたものでした。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

シャンデリアは、非常に美しい彫刻が彫り込まれ、小さなトリトン像があしらわれており、またヘラジカの角と、ノギリザメの鼻骨で装飾されています。これは、昔のバロック様式の城の設備で残存しているものです。

壁の絵画の中は、素晴らしいオランダ人画家、ハンス・デ・ヨーデのバロック時代の風景画があります。これらは元来、城を建立し、侯爵たちによるコレクションを始めたカール・オイゼビウス侯の収集品だったものです。絵画は、彼の死の数年前、1680 年に入手しました。

壁の中に 19 世紀に作られた引き戸が見えますが、これはつい数年前に発見されました。引き戸は改築され、ガラス張りになり、強化枠が隣の部屋にも新しく取り付けられました。扉は 19 世紀には冬の庭園として機能していたダンスホールへつながる廊下へつながっています。

オリンポスの間 (Olympian salon)

この二番目に格式高い部屋は、侯爵一家が公式の社交の場として利用していたもので、王女のプライベートの居室と直結しています。必要に応じて、重要な賓客用の客室にもすぐに模様替えされました。まさにこの暖炉付きの部屋に、イギリスのアーサー王子が 1876 年の皇帝の軍事演習の際に宿泊しました。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

天井画には、すべてのオリンポスの神々が集合している様が描かれています。天然石や象牙の彫刻が埋め込まれた2つの大きな宝石箱は、比較的古いフィレンツェのものを模倣し19世紀に作られたものです。

リヒテンシュタイン家の人々は、ウィーンに大方のコレクションを輸送してしまった後に残った最も貴重な絵画をバロック様式のパネリングと呼ばれる方法で部屋の壁に掛けました。バロック時代のイタリア、またオランダの絵画の中で最も優れたものは、前期バロック時代のナポリ出身の画家、マッティア・プレティによるキリストとカナン人の女を描いた宗教画です。右側の壁に掛けられた大きな絵画は、オラツィオ・リミナルディによるもので、サムソンがライオンを殺める様が描かれています。

左側の壁には有名なオランダ人風景画家、アールト・ファン・デル・ネールの夜景を描いた風景画の大作が掛かっています。彼は、夜景を描く画家の中ではオランダで最も優れていると評されています。印象的な男性の肖像画は、エッセンの伯爵、ヴィルヘルム5世を描いたものです。

廊下の暖炉の上にある絵画は、リヒテンシュタインの侯爵であるヨーゼフ・ヴェンツェルの肖像画です。ヨーゼフ・ヴェンツェルはマリア・テレジア朝の陸軍元帥でした。彼は外国を模倣してオーストリアの砲兵隊を組織したので、「オーストリアの砲兵隊の父」と呼ばれていました。彼はとても有能な軍人であり、また外交官でした。彼の甥であるネポムクのヨハネの死後、リヒテンシュタイン家を治める侯爵になりました。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

東洋の間 (Oriental salon)

この部屋は元々、その当時統治していた侯爵の妻の居室だったのですが、その非常に高価な東洋風の柄が織り込まれた絹製の壁紙にちなんで 19 世紀に名づけられました。この部屋には東洋の陶磁器や日本の漆器など、様々な物品がありました。

第二次世界大戦の終わりにコレクションの大部分が持ち出され、戦後、壁紙も損なわれてしまいました。この広間の元来の役割を証明できる唯一の証拠は、扉上部に残っている色とりどりの絵画装飾と、窓の間の鏡の上にある、中国の岩壁の形を模した金箔が貼られた燭台です。

現在、広間は王女の応接間として家具が配置されています。この部屋の最も大きな絵画は、有名なピーテル・パウル・ルーベンスの油絵「戦争の惨禍の寓話」の、その当時としては高品質な複製です。1639 年に描かれたオリジナルの油絵はフィレンツェに保管されています。複雑な寓話に対する解説は、ルーベンス自身によって執筆されました。

腕を上げている女性は、三十年戦争によって荒廃したヨーロッパを表しています。作品の中央には戦争の神マルスがおり、彼の怒りを愛の女神ヴィーナスが鎮めようとしています。激しい怒りが彼をあまりに強く引っ張っています。同時にマルスは本を踏みつけており、これは科学と文学の全滅を表現しています。壊れたリュートを持っている女性は調和の終焉を体現しており、コンパスを持った死にゆく男性は、建築の破壊を表現しています。ルーベンスは、ヨーロッパの統治者たち



NÁRODNÍ
PAMÁTKOVÝ
ÚSTAV



facebook.com/zamekvaltice
www.zamek-valtice.cz

ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

に仕える外交官として戦争を終わらせようと尽力しましたが、その結果に失望したことを表現するためにこの作品を描きました。

フランドルの代表的な画家で、ルーベンスと同時代の画家であったテオドール・ファン・ルーンはキュプロプス、ポリュペーモス、ヘーパイストス、アプロディーテ、エロスの神話をもとにした芸術作品を描きました。

この広間はまた、ギリシア軍の総大将、アガメムノンによるトロイアの占領が描かれている天井画にちなんで、トロイアの間とも呼ばれています。アガメムノンは、戦争での自軍の勝利を確実なものにするために、大司祭の予言を受け、自分の娘であるイーピゲネイアを神の生贄にしようとしてしました。ギリシア神話によると、いよいよと生贄になるいう時に、女神アルテミスが間に入り、女の子の代わりに雌ジカを聖餐台に置いたということです。

調度品や、美しい装飾が施されたタイルの暖炉は、ロココ時代のものです。

王女の寝室 (Princess's bedroom)

城の東棟のアンフィラードの端から3部屋が侯爵の妻のものだった一方、侯爵自身は反対の棟に専用の居室を所有していました。最後にこの部屋を使っていたのはフランスカ・キンスキー王女で、1831年にリヒテンシュタイン侯アロイス2世と結婚しました。未亡人になってからもこの部屋に住み続けたのは、彼女の息子、侯爵ヨーハン2世が一度も結婚しなかったからです。この3つの部屋には、小さな隠し扉の向こう



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

に作業場もついており、そこには王女の衣装だんすや書斎、使用人の部屋がありました。

この部屋は簡素な家具で設えられていますが、その中で目を引くのは、ベッドの上の聖母の絵です。これはイタリアのルネサンス期の画家、ラファエロ・サンティの絵画の複製で、オリジナルと同じく銅板に描かれています。

右側の壁には、無名のイタリア人画家によって描かれた、ローマのパトリキと呼ばれる絵が掛かっています。

天井の装飾画は、左側は科学と芸術の寓意が描かれており、反対に右側には、高慢、放蕩と酩酊の寓意が描かれています。

バスルーム (Bathroom)

バスルームは、20 世紀初頭もので、この頃、ヴァルチツェの町の水道が侯爵ヨーハン 2 世の寄付の恩恵もあって建設されました（1901 年）。バスルームの設備は、水道の配管も含め、ウィーンの John Gramlic 社が供給しました。バスタブは陶器製で、長時間湯の温度が下がらないように、二重構造になっています。トイレは水洗でした。壁の中に貯水槽があり、壁につけられた窪みの中にトイレの洗浄レバーがありました。便器は魚を象ったものです。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

大理石の小部屋 (Marble cabinet)

バロック建築のアンフィラードの端には、小さくとも美しい、その芸術装飾が全ての部屋の内装の質を凌駕するような私室が配置されているのが理想的であるとされています。部屋を全て見て回った訪問客が、その美しい姿と豪華絢爛さに驚嘆し魅了されるようであればなりません。侯爵が居住していた反対の西棟のアンフィラードの端にも、同様に素晴らしい部屋があります。

この小さな部屋は、宮廷の室内装飾家、アントニオ・ベドゥッツィの設計によるものです。彼は同時期に、ヨーゼフ・ヨーハン・アダム侯の命で城の礼拝堂も設計しました。ここで彼は、画家であるフランツ・ワーナー・タムと緊密に連携して活動しました。タムは、部屋の装飾用に2つの花の静物画を描きました。天井画には、花を司る女神のフローラが描かれており、これは最も素晴らしい天井画の一つとされています。

窓の鎧戸や、ドア、床の寄せ木細工などの素晴らしい象嵌細工は、ベドゥッツィ自身の設計により完成されたものです。

この部屋は、フランス王ルイ 16 世の調度品をお手本に設えられています。暖炉の上にはバロック様式のカララ大理石製の男児の胸像がありますが、これは城の以前の備品だったものです。バロック時代には、骨董品や古美術品のコレクションが流行していました。希少なだけにとっても高価だったので、古美術品の模倣品も購入されました。この美しい胸像もその一例です。



NÁRODNÍ
PAMÁTKOVÝ
ÚSTAV



facebook.com/zamekvaltice
www.zamek-valtice.cz

ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

廊下 (Corridor)

廊下の右側には、歴代のリヒテンシュタイン侯の肖像画があります。最初の肖像画は、リヒテンシュタイン侯で最初の親王である、アントン・フローリアンで、次の肖像画は、「裕福なハンス・アダム」とも呼ばれていた、ヨハン・アダム・アンドレアス侯のもので、彼はウィーンに2つのリヒテンシュタイン宮殿を建設しました。

その宮殿の一つ、ウィーンのロツサウ地域にあるリヒテンシュタイン庭園宮殿は、現在はリヒテンシュタイン家の博物館になっています。ロツサウの宮殿は、左側の2枚の絵画に描かれています。最後の絵画は、ヴァルチツェ城の改築を指揮したカール・オイゼビウス侯の肖像画の複製です。

エレベーター (Lift)

これは乗用エレベーターで、元々はウィーンのA.フライスラー社製の、機械式と電気式で動くものでした。このエレベーターは20世紀の始まりごろに製造されました。エレベーターの室内はマホガニー材の張り板が並べられ、引き戸のガラス部分には、アーヌーヴォー様式の装飾モチーフがエッチングにより刻まれています。

エレベーターには、多くの安全策が講じられていました。乗客が乗ったことを感知する床、引き戸、また操作パネルの非常ボタンがその例です。エレベーターの室内は、2006年に改装されました。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

祈禱室の廊下 (Corridor at the side oratory)

壁の絵には、旧約聖書に登場する預言者のゼカリヤとエゼキエルが描かれています。これらの絵画は 18 世紀初頭、オーストリア＝ハンガリー帝国で活動していたイタリア人画家らによって描かれたものです。最後の絵画は、アッシジのフランチェスコを描いたものです。

祈禱室 (Side oratory)

礼拝堂の横にある祈禱室の壁には、17 世紀の絵画が掛かっています。左側の絵画には、エマオでの晩餐の様子が描かれており、これはイエス・キリストが磔刑に処され復活した後、エマオという村で夕食をとった際、イエスの 2 人の弟子に自分がイエスだと気づかれた時の様子を描いたものです。この作品は、無名のオランダ人画家によるものです。

礼拝堂 (Chapel)

祈禱室の窓からは城の礼拝堂の内装が見えます。礼拝堂はリヒテンシュタイン侯、ヨーゼフ・ヨーハン・アダムの統治下、1729 年になる前に完成しました。設計と内装



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

のフレスコ装飾は、リヒテンシュタイン家に仕えていた宮廷建築家のアントニオ・ベドゥッツィによるものです。

礼拝堂は、城の南棟の2階分の高さがあります。天井は、舟を象ったアーチ型で、精巧なだまし絵が描かれており、また壁と天井の接合部分の建設技巧は圧巻です。天井のフレスコ画は、天国の眺めで、中央には父なる神の姿が描かれています。フレスコ画の作者はアントニオ・ベドゥッツィとドメニコ・マイナルデイです。

聖餐台の絵は、羊飼いの礼拝が描かれており、これはイタリアの画家、ガイド・レ一ニの絵画の複製です。

精巧な彫刻装飾は、フランツ・ビーナーによって提供されたものです。彼は正聖餐台と二つの副聖餐台の装飾を、アーチ形天井の絵画装飾を用いて調和させました。

1726年に城の礼拝堂は奉献されました。この時までには、貴重な木材を用いた精巧な象嵌細工があしらわれ、侯爵の礼拝堂の正面に装飾が施された羽目板が取り付けられ、その上に楽器演奏のための中2階が取り付けられました。象嵌細工が施された扉と信徒席のベンチは、同じ工房で作られたものです。

ここは音響効果が素晴らしく、この親密で芸術的趣向を凝らした空間は、室内楽のコンサート会場として利用されたり、また最近では結婚式場としても利用されています。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

画廊 (Picture gallery)

画廊の絵画は、バロック様式のパネリングという方式で展示されています。画廊は、19世紀頃の姿に改装されています。当時の絵画コレクションの所有者は、ロマン主義に影響を受け、自分達の先祖と同じような並べ方で壁を絵画コレクションで装飾したのです。絵画の額縁は、現存しているものをモデルに新しく作られたものです。ロマン主義の画廊の絵画の並べ方は、全く違った主題の、大きい絵画と小さい絵画を順に並べていく、という特徴がここを見ると分かるでしょう。元々あった絵の一部はよそへ搬送されてしまい、また一部は1945年の第二次世界大戦の終わりに破壊されてしまいました。現在ここには33点の絵画があります。ヴァルチツェ城には、様々な時代の様々な画家による静物画がたくさん展示されています。

例えば、1667年、リヒテンシュタイン侯、カール・オイゼビウスは、ゴットフリート・リバルトという画家が描いた「動物の頭部の静物画」を購入しました。彼は、この地で長い間、具象的な特徴をもつ静物画家として影響を与え続けていました。さらに、侯爵の絵画コレクションの中には、若き静物画家、フランツ・ワーナー・タムの絵画も多く購入されております。彼の絵は、花や果物がとても美しく組み合わせ配置されており、背景には風景の一部もしばしば描き込まれています。城の画廊の風景画と静物画の中には、1804年のI.M.ダリンガーの作品も含まれています。

無名の画家が描いた動物の静物画もたくさんあります。その他にもドレスデン出身のフリードリヒ・シュレーゲルの風景画、さらに個性的な画風で当時の人々の称賛を受けた、有名画家ローザ・ディ・ティヴォリによる動物と鳥の絵などがあります。



NÁRODNÍ
PAMÁTKOVÝ
ÚSTAV



facebook.com/zamekvaltice
www.zamek-valtice.cz

ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

部屋の隅にはロココ調の暖炉があります。天井画は女神ダイアナが狩猟から戻ってきた様子を描いています。これは城で一番大きな天井のキャンバス画です。画廊は、侯爵用の居室の、公式な迎賓の間として利用されました。

侯爵の書斎 (Prince's study)

この部屋は以前は寝室でした。先ほど廊下でご覧になったバスルームは、この居室のもので、元々の壁紙や家具のカバーやベッドカーテンはジェノヴァ製の刺繍が施された絹織物で作られたものです。

画廊、侯爵の書斎、またこれからご覧になっていただく黄金の間が侯爵の居室でした。1848年、ウィーンから逃亡したメッテルニヒ宰相が、ここに2週間滞在し、当時の侯爵アロイス2世が逃亡の手助けをしました。メッテルニヒ宰相は、自分だと悟られないようにリヒテンシュタイン侯の馬車で移動し、ヴァルチツェに最初に滞在しました。その後、彼の滞在が発覚し、街の住民が暴動を起こしたので、ヴァルチツェを後にしなければなりませんでした。

天井画は、宵の寓話が描かれています。

書斎は、豪華なオランダのバロック調の調度品で設えられており、様々な木材や象牙、貝殻の真珠色の光沢をもつ部分で象嵌細工が施されています。

書き物机は、19世紀の精巧な象嵌細工が施されたバロック時代の家具を再現したものです。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

絵画大作「スウェーデンのクリスティーナ女王のローマ帰還」、また「聖十字架の奪回」は、17世紀のもので、聖十字架の奪回（窓のそばにある絵画）は、ルドルフ朝の宮廷画家であったハンス・フォン・アーヘンの絵画の複製です。バロック様式の飾り棚は、クルミの木とブリキの象嵌細工が施されています。

黄金の間 (Golden hall)

この広間の設備は城内で最も豪華なものです。黄金の間から侯爵専用の祈禱室へとつながる扉がオーク材の装飾で隠されているという事実も、この部屋の重要性を物語っています。

天井画は、美の女神アプロディーテーの目覚めという、朝の寓話が描かれています。金属と亀甲の象嵌細工で装飾されたテーブルは、バロック時代のフランス製家具の一例です。金属と亀甲の象嵌細工の家具の最初の原型は、フランスのエベニスト（家具職人の意）、国王ルイ 14 世に仕えたシャルル・アンドレ・ブールによるものです。暖炉の上の胸像は、18世紀のもので、ローマの哲学者、セネカの高美術品の胸像の複製です。大きな肖像画は、有名な戦士で外交官であった、リヒテンシュタイン侯、ヨーゼフ・ヴェンツェルを描いたものです。この部屋は、肖像画にちなんでヴェンツェルの間（Wenzelzimmer）と呼ばれていました。

黄金の間は現在、温風暖房で暖をとりつつ、同時に暖炉で薪を燃やし、その火の美しさも目の当たりにできる唯一の部屋です。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

つなぎの間 (Connecting salon)

この部屋は 18 世紀後半にありふれていた方式で設えられています。壁はブローケードの壁紙が貼られており、ソファーセットの張り布を同じ柄にすることで、調和がとられています。タイル製の暖炉は 18 世紀の終わりの古典主義の作品です。書き物机は貴重な木材や骨がはめ込まれており、18 世紀の半ばの精密な美術工芸品の一例です。この家具には様々な用途があります。小さな扉や引き出しがついた上部は、貴重品や書状などを収めるのに使われていました。真ん中の部分は、象嵌細工が施されたパネルを開けると書き物机になり、引き出しのついた下の部分は整理だんすになっています。オランダの静物画のコレクションは、古典的と呼ばれる類の静物画、つまり対象物が鳥瞰的視点から描かれている静物画が集められています。この画法は、特に 17 世紀前半に好まれていました。

寝室 (Bedroom)

春の寓意が描かれている天井画と化粧しっくい装飾は、今まで見てきた他のものと同様に、18 世紀の最初の 30 年ほど城の内装が大きく改装された時期のもので、天蓋のついたベッドは、バロック時代の調度品の典型的な例です。この時代には、ベッドの幅の狭い側を壁につけ、前の時代には天蓋がベッド全体を覆っていたのに対し、この時代は、ベッドの枕の部分のみにドレープで覆い、影を作るようになりました。白いソファーや椅子は、19 世紀のもので、



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

絵画装飾は 17 世紀のもので、多くの果物に囲まれた男性と女性の胸像を描いた絵画は、アレクサンダー・クーズマンズによるものです。ベッドの上の絵画は、「3 人の王の崇拜」です。二枚の花束の絵はどちらもオランダの静物画で、このような絵は室内装飾として 18 世紀中ごろまで人気がありました。窓の間にある絵は、オランダ人画家、ピーテル・ファン・ラールによる「ローマ石灰窯の周りの風景」です。

19 世紀にヘンリエッタ王女の居室であったこの 2 つの部屋の用途は、何度か変わりました。この階全体の配置と照らし合わせてみても、バスルームは寝室に隣接しているべきなのですが、バスルームは隣の部屋のまた隣です。この事実からも、用途が変わったことが分かります。

迎賓の間 (Reception room)

この部屋は、若い王女の迎賓の間として設えられています。壁の絵画はオランダ人画家やイタリア人画家の静物画や風景画で、右側の壁にはロレンソ・パシネリによるマグダラのマリアの美しい絵があります。扉の上にはまたリヒテンシュタイン侯に仕えた宮廷画家、フランツ・ワーナー・タムの 2 枚の肖像画が飾られています。

暖炉は、古典主義時代のもので、上に置いてあるつぼに水と芳香剤を入れます。水が温まると、香りが部屋全体に広がっていきます。

ボヘミアン・クリスタル製のシャンデリアは 18 世紀のもので、最近改修され、電灯も点くようになりました。



ZÁMEK VALTICE

NÁRODNÍ KULTURNÍ PAMÁTKA, PAMÁTKA UNESCO

侯爵の邸宅には、美しい眺望も重要です。窓からは絵に描いたように美しいパヴロフの丘や、ミクロフ城、モラヴィアで一番大きなネシトという池が見えます。この池は、1418年には既にその存在が史実として記されています。ネシトは15世紀に建設された4つの池のうち、最後に作られたもので、この地から沼地をなくすことに成功しました。この美しい景色が眺望できるので、侯爵の居室が城の西棟に設置されたのです。

控えの間 (Anteroom)

この小さな部屋は、簡素な設えで、いつも側で待機しなければならなかった侯爵夫人のメイド用の部屋として利用されていました。彼女の仕事は夫人の着替えだけでなく、ワードローブの手入れや針仕事、髪結いなども含まれていました。

見学ツアー最後の部屋である控えの間から左のドアを抜けると、ヴァルチツェ城内見学ツアーを開始した廊下に戻ります。

ヴァルチツェ城は侯爵の邸宅として使われていたのみでなく、侯爵不在の際は既に19世紀初頭から、観光客にも公開されていました。この伝統を受け継いでくださり、心より感謝いたします。ご来訪ありがとうございました。よい一日をお過ごしください。



NÁRODNÍ
PAMÁTKOVÝ
ÚSTAV



[facebook.com/ zamekvaltice](https://facebook.com/zamekvaltice)
www.zamek-valtice.cz